

経済史

1. 今回は「経済史」について勉強します。私たちが現在生活している社会は「資本主義」という仕組みのうえに成り立っています。この資本主義という仕組みは 16 世紀から 18 世紀にかけてのヨーロッパで生まれました。人類の歴史が数百万年とされていますから、この資本主義は比較的新しい社会システムなのです。今回は、この資本主義社会を相対化して捉える視点を得るために、近代以前の社会システムの諸類型の特徴について説明してゆきたいと思います。

1. This time, we will study “economic history”. The society we live in now exists within the structure known as "Capitalism". This structure of capitalism arose in Europe between the 16th and 18th centuries. Capitalism is a comparatively new social system because the history of mankind is millions of years old. This time, I would like to explain the features of various pre-modern social systems, in order to get a grasp on the relative viewpoints of a capitalist society.

原始社会

- 人類の誕生：数百万年前～
- 約一万年～：農耕・牧畜の始まり → 「定住革命」
- 血縁関係により結ばれる集団：「氏族」
- 氏族社会の特徴
 - ・ 共同所有（一部は私有）→ 「総有制」（首長による管理）
 - ・ 相互扶助機能
 - ・ 対内道徳 と 対外道徳
- 定住社会：血縁 → 地縁
⇒ 「村落共同体」

2. 最初に「原始社会」について説明してきます。人類は数百万年前に登場したといわれていますが、当初は特定の地域に定住することなく、自然物の採取や狩猟を中心とする生活をしていました。ですが、今から約一万年前に採取や狩猟と並行して、特定の地域に定住して農耕や牧畜をおこなうようになります。このことは「定住革命」と呼ばれます。

2. First, I will explain about "Genshi shakai (primitive society)". It is said that humans came into existence millions of years ago. At first, they did not settle in a specific area, and their life was mainly one of hunting and gathering. However, about ten thousand years ago they settled down in a specific region and began farming and stock breeding concurrently with hunting and gathering. This is called "Teijū-kakumei (settlement revolution)".

3. このような時代には、個々人が独自に生活することは困難です。自然のなかで生存してゆくためには人々の協同労働が欠かせません。この協同労働を支えるものが血縁関係でした。血縁とは血で結ばれた関係を意味します。この血縁によって結ばれている社会的集団を「氏族」と呼びます。このような氏族制度は人類の歴史において、地球上の各地で見られます。

3. It was difficult for individuals to live independently in such an age. In order to survive in nature, people's joint labor was essential. This joint labor was supported by kinship. Kin here means relations connected by blood. A social group connected by kin is known as a "clan". Such clan systems have been seen in various places on earth throughout the history of mankind.

4. 氏族社会では、氏族によって共同で獲得されたものは、すべて氏族によって共同で所有される財産となります。衣服や武器、装飾品などは私的に所有されていましたが、ごく僅かです。生産手段である土地も氏族全体で所有されていて、個人の私的所有はありません。つまり氏族全体で「共有」されている、ということです。このような所有関係を「総有制」と呼びます。こうした共有財産は氏族の首長によって管理されていました。首長はまた、祭祀や軍事などの機能も担っていました。
5. 生産性の水準が低い時代では、成員の生存は自然条件に依存することになります。ですから、成員の身勝手な行動は厳しく規制されていました。ですが反面では、つよい相互扶助機能も有していました。成員の生活を維持してゆくには、氏族集団の存在が不可欠であったのです。同時に、氏族集団は自分たちの生活を維持してゆくために、他の氏族からの危害には攻撃的に応じることになります。つまり対内道徳、同じ氏族に属する仲間に対する道徳と、対外道徳、他の氏族に対する道徳とが異なるのです。
6. このような集団は血縁を基盤としていますが、定住して集落を形成するようになると、農業生産の比重が増して、血縁よりも地縁の結びつきが強くなります。地縁とは住む土地に基づいて結ばれる関係を指します。このような地縁によって結ばれた集団を「農業共同体」といいます。
4. In clan society, goods which are jointly acquired by the clan become property jointly owned by the entire clan. Clothes, arms, and adornments were privately owned, but were relatively few in quantity. Land that is a means of production is also owned by the clan; individuals do not own it privately. In other words, it is "co-owned" by the entire clan. Such an ownership relation is called "Souyū-sei (total ownership system)". Such a community's property was managed by the clan leader. The leader also handled ritual and military functions.
5. In the non-productive age, survival depended on natural conditions. Because of this, selfish behavior was severely restricted. On the other hand, however, the clan had a strong function of mutual assistance. In order to maintain life, the existence of the clan group was indispensable. At the same time, in order to preserve their lives, the clan group would respond aggressively to danger from other clans. Thus, inward morality regarding companions who belong to the same clan differs from outward morality regarding other clans.
6. Such are groups based on kinship; but when they settled and formed villages and the proportion of agricultural production increased, territorial relationships become stronger than kinship. A territorial relationship signifies relations connected by the land they live on. This relationship is called an "agricultural community."

キーワード

・ 定住革命 (ていじゅうかくめい) ・ 総有制 (そうゆうせい) ・ 氏族 (しぞく) ・ 農業共同体 (のうぎょうきょうどうたい)

関連用語

- ・ 原始共同態 (げんしきょうどうたい) : primitive community
- ・ 固有の二元性 (こゆうのにげんせい) : inherent dualism

日本語解説

文1 資本主義

「主義」は3つの種類があります。

1. 持ちつづけている 考え・目標・態度など。「完全主義」「菜食主義」
2. 理論などの立場。「実存主義」「自然主義」
3. 社会体制・制度など。「資本主義」「民主主義」

文1 比較的～です。

「わりあい」という言葉も使われます。他と比べてそれよりも良かったり、多かったりするという意味です。

例1. 部屋は比較的 (わりあい) きれいです。

例2. 比較的 (わりあい) やさしい問題です。

文3 「共同」と「協同」

この2つは全部「きょうどう」と読み、意味も似ています。2つの違いは「共同」は「2人以上の人が一緒に何かをする (使う)」という意味で、「共同」は同じ資格を持った人々が同じ目的のために力を合わせることです。例えば、共同研究、共同生活などです。「協同」は人々が役割を分担しながら同じ目的のために力を合わせることです。例えば、協同組合、産学協同などがあります。

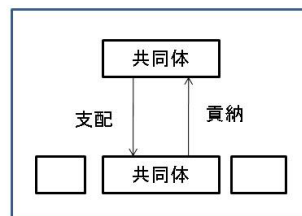
貢納制社会

- 「貢納」＝「貢ぎ物を納める」
- 生産単位：氏族⇒家族（「家父長制的家族」）
- 共同体の連合の形成（古代オリエントetc...）

貢納制社会の特徴

- ◆巨大専制国家
- ◆大河流域における農耕

- 支配・被支配関係 ⇒「貢納」
- 灌漑：共同体間作業



1. つぎに、「貢納制社会」について説明したいと思います。「貢納制社会」の「貢納」とは「貢ぎ物を納める」という意味です。

2. 「定住革命」による農耕の発展によって生産力が向上してくると、共同体内において家屋や労働用具などの私的所有が拡大してきます。こうした所有関係を基礎として、生産単位がそれまでの氏族から家族へと移行してきます。これを「家父長制的家族」と呼びます。有力な家族の長が共同体の長となり、他の共同体に対する侵略や征服を通じて共同体の連合が形成されてきます。

3. この共同体の連合が古代オリエントや古代エジプト、古代メソポタミアなどの古代文明です。「貢納制社会」とは、このような古代文明に代表される社会システムなのです。これらの社会の特徴は、第一に官僚機構を有する巨大専制国家であっ

1. Next, I will explain the "kounou-sei shakai (tribute system society)." The meaning of "Kounou" is "to pay tribute".

2. When the development of farming by the *teijū-kakumei* improved productivity, the private ownership of goods such as houses and tools for labor expanded in the community. On such a basis of possession, the unit of production shifts from the clan to the family. This is called a "patriarchal family". The leader of the dominant family becomes the leader of the community, and community union is formed through the invasion and conquest of other communities.

3. This kind of united community included ancient civilizations such as the ancient Orient, ancient Egypt, and ancient Mesopotamia. The tribute system society as a social system is typified by this kind of ancient civilization. These societies had

たということ、第二に大河流域に栄えた農耕を中心とする社会であったということです。

4. 最初に、第一の特徴として挙げた専制国家であるという点に注目してみましょう。政治的に統一された共同体の連合は支配・被支配の関係にあります。この支配関係から「貢納」が発生してきます。つまり、支配された下位の共同体から上位の共同体へと貢ぎ物が納められるのです。この貢ぎ物の形態は主として被支配共同体の余剰生産物からなります。国の倉庫に納められた貢租は必要に応じて分配されていました。専制国家の経済的基礎は、この被支配共同体からの国家に対する貢納にあると言えるでしょう。この貢ぎ物が後の「税」になってゆくのですね。古代エジプトにみられるような官僚組織の形成は、こうした貢ぎ物の徴収と密接に関連しているのかもしれません。

5. 第二の特徴に挙げた大河流域における農耕についてみてみましょう。さきにも述べたように、古代社会では農耕が行われていましたが、オリエントやエジプトにおける大河流域では河川の氾濫を利用した農耕が行われていました。つまり、灌漑が行われていたのです。こうした大規模な設備の建設は、複数の共同体による共同作業によって行われていました。ですか

two features: the first is that these bureaucratic societies were huge despotic states; the second is that they flourished in large river basins, and were based on agriculture.

4. To begin with, let us look at the first feature of these societies: the tyrannical state. The consolidation of politically united communities entails a relationship between ruler and subject. Tribute is generated from this relationship. In other words, tribute is offered by subordinate communities to the dominant community which rules over them. The form of this tribute consists mainly of surplus products from the subordinate communities. Annual tribute was stored in the state warehouse, and distributed if necessary. It can be said that the economic foundation of these despotic states is the tribute from the subjected communities. This tribute later became "Tax." The formation of the bureaucratic system such as that of ancient Egypt may be closely related to the collection of such tribute.

5. Next, let us examine the second feature: farming in large river valleys. As stated before, ancient societies did practice agriculture; in large river valleys in the Orient and Egypt, farming utilized the flooding of the river. Thus, they could carry out irrigation. Such large-scale equipment was constructed by the joint work of multiple united communities.

ら、このような古代文明社会における専制国家では、その長は灌漑機構の管理者でもあったのです。

Because of this, in the despotic states of such ancient civilized societies, the ruler was also a superintendent of irrigation.

6. また専制国家の長は、祭祀の担当者でもありました。祭祀機能は、私たちが想像する以上に重要であったと考えられています。

6. Moreover, the leader of the despotic state also supervised rituals. It is thought that the function of rituals was more important more than we can imagine.

キーワード

・家父長制的家族 ・貢租 ・灌漑

関連用語

- ・アジア的生産様式（あじあてきせいさんようしき）：Asiatic mode of production
- ・実質的平等（じっしつてきびようどう）：substantial equality

日本語解説

文2 ～による

何かが起こる原因という意味です。例として「不注意によるミス」があります。

文2 生産力

「力」が付く熟語はたくさんあります。

体力、実力、影響力、権力、暴力、努力などです。

文3 古代

古い年代から、

古代→中世→近世→近代→現代

の順番になっています。

文4と文5 ～てみましょう

ためしに～をするという意味があります。

例 歴史について考えてみましょう。

このソフトをコンピュータにインストールしてみましょう。

奴隷制社会

- 市民による奴隷使用(古代ローマ)
- 奴隷:「もの言う道具」
 - ◆ラティフンディウムを基盤に形成されたウィラ(荘園)
における農業労働(葡萄・オリーブ栽培)
 - ◆結婚・家族の保有を認められず
⇒外部からの供給(戦争による捕虜⇒奴隷)
- 帝政期: 対外拡大の限界 ⇒ 奴隷供給減少
- 奴隷⇒「コロヌス」(農奴)

1. 次に「奴隷制社会」について説明します。
 2. 「奴隷制社会」とは市民全員が奴隷を所有する社会で、古代ローマや古代ギリシャがその典型です。奴隷制社会も農業を基盤とする社会でしたが、貢納制社会よりもいっそう階級分化が発展していました。ポリスやキウィータスといった都市における市民層は、奴隷を使用して所有地を耕作する戦士であり、この社会の中心となる階層です。ここでは古代ローマを例として、「奴隷制社会」の特徴についてみましょう。
 3. ローマでは労働は卑しいこととされていて、市民は労働に従事しませんでした。ローマでは生産労働は奴隷によって担われていました。奴隷は「もの言う道具」と表現されます。家畜が「半ばもの言う道具」と表現されますから、
1. Next I will explain "*Dorei-sei shakai* (slavery society)".
 2. A feature of this type of society is that all civilians own slaves; ancient Rome and Greece are typical examples. This slavery society was also based on agriculture, but its class differentiation had developed further than the tribute system society. The citizens of cities, in which police and civitas were soldiers, cultivated property using slaves and were the center of this type of society. Let us take ancient Rome as an example and look at the features of the slavery society.
 3. Labor was taken to be vulgar in Rome, and citizens did not engage in manual labor. Production work was undertaken by slaves. Slaves were treated as "talking tools". They were treated like domestic animals, because livestock was known as a

家畜同然の扱いを受けていたということになります。奴隷労働は工業や鉱山において多数みられましたが、何といっても大規模な奴隷労働の集積がみられたのが、「ラティフンディウム」と呼ばれる大私有地を基盤に形成された「ウィラ」と呼ばれる荘園における農業労働でした。「ラティフンディウム」とは、大規模な奴隷制プランテーションを意味します。奴隷は主に葡萄やオリーブの栽培をおこない、生産された作物は市場向けに販売され、土地所有者の利益となっていました。

4. ローマでは奴隷の結婚が認められておらず、家族をもつことも認められていませんでした。ですから、労働を維持してゆくためには、絶えず外部から奴隷の供給が不可欠となります。このような労働力となる大量の奴隷はどこから供給されていたのかというと、対外戦争の過程で獲得された捕虜が奴隷としてローマに供給されていました。ローマの戦争や侵略といった対外的な拡大は、領地の獲得のみならず、奴隷の獲得という意味においても重要であったというわけです。「貢納制社会」でみた貢納は、共同体を共同体として支配することで発生しましたが、奴隷は征服した共同体の成員を個々に支配することで発生したと言えます。

5. しかしながら、帝政期に入って領土の拡大が限界に達すると、奴隷の供給が減少することになりました。するとローマは、それまでの摩耗的な奴隷使用

"semi-vocal tool". Slave labor was seen in great amounts in manufacturing factories and mines, although the large-scale slave labor accumulations were mainly seen on large private estates called "latifundiums," as the basis of agricultural labor on large manors called "villas". "Latifundium" means a large-scale slave-labor plantation. Slaves chiefly grew grapes and olives, and the crops were sold for market, for the benefit of the landowner.

4. In Rome slaves were not permitted to get married or have a family. Therefore, to maintain labor, it was essential to have a constant supply of slaves from outside. Where did such a large supply of slave manpower come from? Prisoners of war captured in the process of foreign wars were supplied to Rome as slaves. For Rome, war and foreign expansion by raid were important, not only for the acquisition of territory but also for the acquisition of slaves. The tribute we saw in the tribute system society was generated from ruling the community as a cooperative system, but it could be said that the slave was generated from individually ruling over the members of conquered communities.

5. However, during the period of the Roman Empire, the supply of slaves decreased when the expansion of territory reached critical limit. Rome stopped this wearing

をやめて奴隷に家族を持つことや農具を保有することを認めるようになります。こうして出現した農奴を「コロナス」と呼びます。

use of slaves, who were then permitted to have families and possess agricultural tools. Slaves then became serfs, who were called "Colonus".

キーワード

・奴隷 ・ラティフンディウム ・ウィラ ・コロナス

関連用語

・戦士共同体（せんしきょうどうたい）：soldiers community
・公有地（こうゆうち）：public land

日本語解説

文2 いっそう

今までよりももっと～になるという意味です。

例 雨がいっそう強く降り始めました。

文2 奴隷制

「～制」きまりという意味です。「～制度」でもいいです。

例 週休二日制、定額制、夫婦別姓制

文4 供給

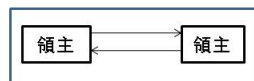
必要に応じて物をあげることに。

反対の言葉は「需要」で必要として求めること。

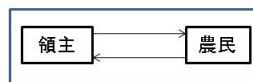
封建制社会

- 封建制社会：8・9世紀～18・19世紀
ヨーロッパ・日本

- ①レーエン制：主従関係
 - 上位領主→下位領主：権利保障
 - 下位領主→上位領主：忠誠・軍役

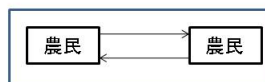


- ②領主制：領主と農民間の関係
 - 農民→領主：地代
 - 領主→農民：支配・保護



封建制社会

- ③村落共同体：農民間関係
 - 宅地、庭畑地
 - 耕地(単位:フーフェ)
 - 共同地



◆「三圃制」

- 耕地を3つに区分, 2つの耕地と1つの休耕地

- ギルド：都市における手工業者・商人の同業組合
 - 価格や取引量の規制

1. つぎに、「封建制社会」について説明します。

2. 封建制社会は8世紀, 9世紀頃から18・19世紀頃までヨーロッパや日本でみられた社会システムです。ここでは, 封建制の構成要素をヨーロッパの封建制社会を例に説明します。

1. Next, I will explain the "Houken-sei shakai (feudal society)".

2. The feudal society was a social system which was seen from the 8-9th century to the 18-19th century in Europe and Japan. Here, I explain the components of feudalism using the example of the feudal

3. 封建制社会を構成する第一の要素は「レーエン制」です。レーエン制は領主間の主従関係を意味します。下位の領主は上位の領主に対して忠誠を誓い、軍役奉仕をして、上位の領主は下位の領主に対して、領地やその他の権限を保障するという関係です。

4. 第二は「領主制」です。領主制とは領主と農民の関係を表しています。領主は土地所有者として農民から地代を徴収していました。この地代は賦役労働や生産物、あるいは貨幣からなっていました。賦役労働は中世初期にはひろくみられましたが、12・13世紀頃からは縮小傾向にあり、生産物や貨幣による地代へと変化してゆきました。領主と農民は支配・被支配の関係にあります。農民は、隷属的な身分に置かれていました。しかしながら、領主は暴力的に農民を支配していただけではありません。領主は農民を保護する役割も担っていたのです。保護の内容は、外敵からの防衛といった対外関係だけでなく、共同体内部でおこる事件に対する警察や裁判機能も担っていました。

5. 封建制を構成する第三の要素は、「村落共同体」です。村落共同体とは農民相互間の関係を表しています。村落共同体は、村落の土地を保有する農民家族からなっています。農民家族は宅地

society in Europe.

3. The first element that composes the feudal society is the "Lehen system". The Lehen system means the superior-subordinate relationship between lords. The lower-rank lord offers military service and loyalty to a superior lord, and the superior lord secures territory and other jurisdictions for the subordinate lord.

4. The second is the "manor system". This means the relationship between the lord and the peasants. The lord as landowner collected land rent from the peasants. This rent consisted of compulsory labor, goods or money. Compulsory labor was common at the beginning of the Middle Ages, but it tended to lessen around the 12-13th centuries, and changed into rent consisting of goods or money. The relationship between lord and peasant is that of ruler and subject. The peasant was in the subjected position. However, no lord was to rule peasants by violence. The lord played the role of protector of the peasants. This protection included not only foreign relations and defense from outside enemies, but also functioned in police work and the trials relating to incidents in the community.

5. The third element that comprises feudalism is "village community". This is the relationship between peasants. The village community consisted of peasant families who held land in the village. Peasant

と庭畑地、穀物を栽培する耕地の一定面積、放牧地・森林といった共同地の利用権を保有していました。保有する耕地の単位を「フーフエ」と言い、ある村落に30フーフエの土地があるということは、30家族の生計を維持できる土地があることを意味します。耕地や共同地は共同体による管理下に置かれ、農民は一定の耕作様式に従って共同作業で作物の耕作をおこなっていました。村落共同体におけるこの耕作様式を「三圃制」と呼びます。三圃制とは、耕地を三つに区分して、二つの耕地で大麦や小麦などの耕作を行い、残りひとつを休耕地に当てるというものです。この三圃制によって、中世ヨーロッパにおける農業生産性は増大することとなりました。

families had a house, a garden field, a constant area of arable land that grows grain, and the right to use the common fields such as pastures and forests. The unit of arable land is a “virgate”; a village of 30 virgates means that there is enough land for 30 families to make a living. Arable land and common land were placed under the management of the community, and the peasants cultivated crops by joint work which conformed to a standardized style. This cultivation style in the village community is called the "three-field system". The three-field system divides arable land into three, cultivating barley and wheat in two arable fields, while another lies fallow. Agricultural production increased due to this system in Middle Ages Europe.

6. 都市における「ギルド」も共同体の一形態であると言えるでしょう。11世紀から13世紀にかけて、ヨーロッパでは多数の都市が誕生しました。都市の経済的機能を担うのは手工業者や商人であり、多くの場合が自治都市でした。商人や手工業者は「ギルド」という同業組合を結成して、構成員相互の競争を排除して、価格や生産量を規制していました。また手工業者による同業組合を特に「ツunft」と呼びます。

6. It could be said that the "Guild" in the medieval city was one form of community. Many cities were formed from the 11th to 13th centuries in Europe. Craftsmen and merchants assumed an economic role in the city, many of which were burghs. The merchants and the craftsmen formed the trade organizations called "Guilds," eliminating competition between constituent members, and regulating price and production. More specifically, the craftsmen's union organization was known as the “Zunft”.

キーワード

・レーエン制^{せい} ・領主制^{りょうしゅせい} ・村落共同体^{そんらくきょうどうたい} ・ギルド

関連用語

- ・古典荘園制（こてんしょうえんせい）：classical manor system
- ・純粋荘園制（じゆんすいしょうえんせい）：pure manor system

日本語解説

文2 ～世紀^{せいき}

21世紀^{せいき}は 2001年^{ねん}から 2100年^{ねん}までです。

文3 関係^{かんけい}

主従関係^{しゅじゅうかんけい} 主人^{しゅじん}と従者^{じゅうしや}の関係^{かんけい}

血縁関係^{けつえんかんけい} 親子^{おやこ}・兄弟^{きょうだい}姉妹^{しまい}など血^ちのつながっている関係^{かんけい}

契約関係^{けいやくかんけい} 2人^{ふた}以上^りの人が約束^{いじよう}をした関係^{ひと やくそく かんけい}

文4 初期^{しよき}

初期^{しよき}は

始^{はじ}まってすぐのころの事^{こと}を言^いいます。

初^{はじ}めの頃^{ころ}から順^{じゆん}番^{ばん}に

初期^{しよき}→中期^{ちゆうき}→後期^{こうき}

となります。

文5 ～からなっています ～から構成^{こうせい}されています

どちらも同^{おな}じ意^い味^みです。いくつかの物^{もの}を合^あわせて一^{ひと}つの物^{もの}になっているということです。

文6 手工業者^{しゅこうぎやうしや} 商人^{しょうにん}

職^{しよく}業^{ぎやう}を表^{あらわ}す言^{こと}葉^ばでは者^{もの}、人^{ひと}、家^{いえ}、師^しなどの漢^{かん}字^じを使^{つか}って人^{ひと}を表^{あらわ}します。

者^{もの} 科学^{かがく}研究^{けんきゆう}者^{しや} 技術^{ぎじゆつ}者^{しや} 記者^{きしや} 医^い者^{しや}

人^{ひと} 会^{かい}計^{けい}検^{けん}査^さ人^{にん} 管^{かん}理^り人^{にん} 料^{りやう}理^り人^{にん}

家^{いえ} 写^{しゃ}真^{しん}家^か 音^{おん}楽^{がく}家^か 画^が家^か

師^し 看^{かん}護^ご師^し 教^{きやう}師^し 薬^{やく}剂^{ざい}師^し

経済学史

1. ここから「経済学史」の領域に入りま
す。「経済学史」では、「経済学の父」と
呼ばれるアダム・スミスについて取り上
げます。スミスには代表的な著作が二
つあります。『道徳感情論』と『国富論』
です。今回は、『道徳感情論』における
「同感」という概念と、『国富論』にお
ける「分業」について説明したいと思ひ
ます。
1. Here we enter the field of "History of
economics". In the "History of economics,"
I will take up the "Father of economics,"
Adam Smith. Smith has two representative
texts. These are *The Theory of Moral
Sentiments* and *The Wealth of Nations*. This
time I want to explain the concepts of
"sympathy" from *The Theory of Moral
Sentiments*, and "division of labor" from
The Wealth of Nations.

同感(『道徳感情論』)

- 1759年:『道徳感情論』
- 「同感」: 他者の行動・感情の適宜性を判断する基準
 - ◆想像上の立場交換 → 相互的に
- 「公平な観察者」
 - ・自身の行為を客観的に判断
 - ・経験を通じて形成(自身の行為が是認されるか否か)
- 「賢人」と「弱い人」
 - ・「賢人」の基準:「公平な観察者」
 - ・「弱い人」の基準:世間の目(「虚栄」)
 - ◆富の獲得への努力 → 経済発展の原動力

2. 最初に、『道徳感情論』の中から、「同感」という概念を取り上げます。1759年に出版されたこの『道徳感情論』は道徳哲学についての著作ですが、この『道徳感情論』における人間像は『国富論』における人間像にも通じるものです。この『道徳感情論』の中で、スミスは人間が道徳的判断をどのようにして行なうのか、という問題を「同感」という概念を用いて説明をしています。ではこのスミスにおける「同感」とは一体どういうものなのか、みてゆきましょう。

3. スミスによれば、私たち人間は他者の感情や行為に関心を持ちます。私たちは、他者の行為や感情に対して、喜びや悲しみ、時には怒りを感じます。「同感」とはこの他者の行動や感情を判断する基準となるものなのです。喜びや悲しみといった感情を、想像力をつかって自分がその他者の立場に立ってみて、それら感情の「適宜性」を判断するのです。

2. The concept of "sympathy" is taken from *The Theory of Moral Sentiments*. *The Theory of Moral Sentiments*, published in 1759, is a work of moral philosophy, but the image of an ideal man in this text relates to that in *The Wealth of Nations*. In *The Theory of Moral Sentiments* Smith explains the problem of how man makes moral judgments by using the concept of "sympathy". So, let's see what kind of thing this "sympathy" of Smith's is.

3. According to Smith, men are interested in others' actions and feelings. We feel happiness, sadness, sometimes anger regarding other people's actions and feelings. "Sympathy" is the standard by which to judge them. We use the power of imagination to put ourselves in the other person's position, and judge the appropriateness of these emotions of

4. また、こうした同感^{どうかん}は一方的^{いっぽうてき}なものではありません。自分が他者^{たしや}に関心^{かんしん}を持つように、他者も自分に^{じぶん}に関心^{かんしん}を持つでしょう。自分の行為^{こうい}や感情^{かんじよう}が他者から^{たしや}是認^{ぜにん}されることは快^{こころよ}く感じますが、否認^{ひにん}されると不快^{ふかい}に感じます。ですから、人間^{にんげん}は自分の行為^{こうい}や感情^{かんじよう}を他者から^{たしや}是認^{ぜにん}されるものに合わせようとします。この立場^{たちば}の交換^{こうかん}とは相互^{さうごてき}的^{おこ}に行われるのです。

5. ですが、個々人^{ここじん}によって感じ方^{かんじかた}や判断^{はんだん}の仕方^{しかた}は異なります。そこで自分の行為^{こうい}を客観^{きやつかん}的に判断^{はんだん}するのが、利害^{りがい}関心^{かんしん}のない「公平^{こうへい}な観察者^{かんさつしや}」です。人間^{にんげん}は、経験^{けいけん}を通じて自分の行為^{こうい}や感情^{かんじよう}が、他者から^{たしや}是認^{ぜにん}されるものか否^{いな}かを知ります。こうして自分の心^{こころ}の中に「公平^{こうへい}な観察者^{かんさつしや}」を形成^{けいせい}して、この観察者^{かんさつしや}の是認^{ぜにん}および否認^{ひにん}によって自己^{じこ}の行動^{こうどう}や感情^{かんじよう}の適宜^{てきぎせい}性を判断^{はんだん}するのです。

6. スミスは、このような「公平^{こうへい}な観察者^{かんさつしや}」の判断^{はんだん}に従^{したが}い行動^{こうどう}する人のことを「賢人^{けんじん}」、実際の世間^{じっさい}の目^めを判断^{はんだん}基準^{きんじゆん}として行動^{こうどう}する人を「弱い人^{ひと}」と呼びました。人間^{にんげん}は、悲哀^{ひあい}よりも歓喜^{かんき}により同感^{どうかん}します。富^{とみ}は歓喜^{かんき}を連想^{れんそう}させるので、富める者^{もの}は世間^{せけん}から多くの同感^{どうかん}を得^えられると「弱い人^{ひと}」は考^{とみ}えて、富^{とみ}の獲得^{かくとく}に向けて努力^{どりよく}をします。「弱い人^{ひと}」を富^{とみ}の獲得^{かくとく}に向^{むか}かわせる動機^{どうき}となる感情^{かんじよう}を「虚栄^{きよえい}」と呼びますが、スミスは

happiness or sadness.

4. Moreover, this sympathy is not one-sided. As we are interested in others, other people will be interested in us. We feel comfortable when our actions and emotions are approved by others; but if our actions and emotions are disapproved by others, we feel uncomfortable. Therefore, humans try to match their actions and emotions to those that will be approved by others. This exchange of standpoints is carried out mutually.

5. However, the way of feelings and judging differs among individuals. The "impartial observer" is one that judges action objectively, without a sense of advantage or disadvantage. A person knows through experience whether their actions and emotions are approved or not by others. The "impartial spectator" is formed in our own minds, and we judge the propriety of our actions and emotions by this spectator's approval or disapproval.

6. Smith called a person who acted according to the judgment of the impartial spectator a "wise man", and a man who used actual people's judgements as a standard a "weak man". Humans sympathize more with joy than with grief. The "weak man" thinks that the rich man acquires sympathy from others because he associates wealth with joy, so they make an effort to become wealthy. The incentive that motivates the weak man to

この「虚栄」に基づく富の獲得の努力こそが、経済を発展させる原動力であるとしています。

acquire fortune is called “vanity”. Smith assumes that the effort to acquire fortune based on "vanity" is a basis of developing economy.

7. ただし、スミスはこの行為を空しい行為であるとしています。またこの努力は正義の原則に従って、他者から同感されるような行為でなければならないと述べていることに、注意しなくてはならないでしょう。

7. However, Smith thought that this is an empty action. Moreover, we should be aware that Smith stated that this effort should abide by the principle of justice and that others must sympathize with the action.

キーワード

・同感 ・適宜性 ・公平な観察者 ・虚栄

関連用語

- ・一般的諸規則（いっぱんてきしよきそく）： general rules
- ・義務の感覚（ぎむのかんかく）： sense of duty

日本語解説

文2 ～論

ものの意見を述べることという意味です。

例 一般論、国際関係論、ダーウインの進化論など

文3 ～によれば

「～によると」と同じです。

情報がどこ、誰から出たのかを表します。

例 新聞によるとまたバスの運賃が上がるそうです。

山田君によると明日は田中先生の講義がキャンセルされたそうです。

文4 是認する

人の行動や考えなどを良いと認めること。

反対の言葉は「否認する」です。

例 山本さんの計画を是認した。

文5 客観的きやつかんてき

自分じぶんだけでなく、他の人々たひとびとの立場たちばになって物事ものごとを見たり考みえたりすることです。

反対はんたいの言葉ことばは「主観的しゅかんてき」です。主観的しゅかんてきは自分ひとりじぶんのものの見方みかた・感じ方かんかたです。

例れい 客観的きやつかんてきな意見いけんを述べてください。

分業(『国富論』)

- 1776年:『国富論』
- 「富」とは
 - ◆重商主義者:金銀などの貨幣 ◆スミス:生活資料
- 富(生活資料)の源泉→「労働」
- 労働の生産性上昇のためには「分業」が必要
- ピン工場の例
 - ◆各製造工程: 工員が専念 or 分担
 - ◆48000本の生産/1日 → 4800本/1人
 - ⇒ 社会的分業についても同様
- 分業が起こる要因
 - ◆「交換性向」⇒「自愛心」にもとづく交換

1. つぎに、1776年に出版された『国富論』の中から「分業」について取り上げます。
 2. トーマス・マンなどに代表される重商主義者たちは、富とは金や銀といった貨幣であると考え、この金銀を多く獲得することが一国の富を増大させることを可能にするのだとしています。
 3. これに対して、スミスは、富は金や銀などではなく必需品や便益品などの生活資料であるとしています。こうした生活資料がじゅうぶんに供給されていることが、諸国民が豊かな状況にあるということです。そして、この富を生み出す源泉となるものが「労働」です。つまり、豊かさを増進させるには、労働の生産性を高めることが必要になります。その生産性を高めるもの、それが「分業」です。『国富論』の中で、スミスはピン工場を例にとって分業の効果を説明しています。その内容について
1. Next I will take up the "division of labor" from *The Wealth of Nations* published in 1776.
 2. Mercantilists, exemplified by Thomas Mun etc., assume that wealth is money like gold and silver, and think that to acquire a lot of this gold and silver can increase the wealth of a nation.
 3. On other hand, Smith thinks that wealth is not gold or silver but necessities and goods convenient for living. A nation may be considered wealthy if it has enough of these goods for living. And a source of this wealth is "Labor". In other words, it is necessary to improve the productivity of labor in order to increase wealth. "Division of labor" is one thing that improves productivity. In *The Wealth of Nations* Smith explained the effectiveness of the division of labor, using the example of a pin factory. Let us look at the details of this.

てみてみましょう。

4. ピンを1本^{ぼん}作るのには、いくつか^{いくつ}の工程^{こうてい}が存在^{そんざい}します。まず、材料^{ざいりょう}となる針金^{はりかね}を引き伸ばしたり、それを真^まっすぐに^ひして、切断^{せつだん}します。それを尖^{とが}らせたり、頭^{あたま}をつけるために先端^{せんたん}を削^{けず}ったりする作業^{さぎょう}など、工程^{こうてい}は多岐^{たき}にわたります。スミスは、このピン製造^{せいぞう}は約18の工程^{こうてい}に分^わかれていますと言^いいます。そこでは、一人^{ひとり}の工員^{こういん}が一つ^{ひとつ}の工程^{こうてい}に専念^{せんねん}するか、また二つ^{ふた}から三つ^{みつ}の工程^{こうてい}を分担^{ぶんたん}して作業^{さぎょう}をおこなっていました。つまり、製造所^{せいぞうじょ}内で分業^{ぶんぎょう}が行^{おこな}われていたのです。
5. スミスが実際^{じっさい}に見たというピン工場^{こうじょう}では、10人^{にん}が雇^{やと}われていて、多いときでは1日^{いちにち}に48,000本^{ぼん}のピンを作^{つく}ることが可能^{かのう}であったそうです。10人^{にん}で48,000本^{ぼん}なのですから、一人^{ひとり}あたりの1日^{いちにち}の生産量^{せいさんりょう}は4,800本^{ぼん}ということになります。もしこれらの工程^{こうてい}を一人^{ひとり}でおこなっていたら、1日^{いちにち}に20本^{ぼん}作^{つく}ることさえ困難^{こんなん}であろうと、スミスは述^のべています。
6. つまり、分業^{ぶんぎょう}がおこなわれていることで、社会的^{しゃかい}富^ふである生活資料^{せいかくざう}の拡大^{かくだい}が可能^{かのう}になるわけです。ここでの分業^{ぶんぎょう}は工場内^{こうじょうない}の事例^{じれい}ですが、これは社会的^{しゃかい}分業^{ぶんぎょう}についても同じ^{おな}じことが言^いえます。社会^{しゃかい}におけるすべての職業^{しよくぎょう}を一人^{ひとり}でこなすよりも、一つの職業^{しよくぎょう}に専門化^{せんもんか}して、交換^{こうかん}をおこなえば、社会全体^{しゃかいぜんたい}の富^ふは拡大^{かくだい}することになります。
7. ではなぜ分業^{ぶんぎょう}がおこるのでしょうか。スミスによれば、分業^{ぶんぎょう}がおこなわれる
4. Several processes go into making a pin. First you draw out the wire, straighten it, cut it, make it pointed, and grind it at the top to receive the head. The processes of manufacture are many and various. Smith says that this pin manufacture was divided into about 18 processes. One workman concentrated on one process or was allotted 2 or 3. In other words, the division of labor was done in the place of production.
5. In the pin factory which Smith actually saw there were ten workmen employed, and it was able to make 48,000 pins in one day. Ten workmen can make 48,000 pins, so per capita pin production in a day is 4,800. Smith states that if one workman did every process it would be difficult for one man to make 20 pins in a day.
6. In fact, the division of labor makes it possible to increase the wealth of a society. This is an example of division of labor in a factory; the same thing can be said regarding the social division of labor. If people specialize in one occupation and exchange their products rather than doing every type of work, the wealth of the whole society will increase.
7. So, why is the division of labor generated? According to Smith, man

のは、人間には「交換性向」が備わっているからだとしています。人間がある特定の職業に特化するのは、社会全体の富を増大させようと意図したためではなく、自己の利益のためだからです。ですから、人間が「自愛心」に基づき自己の生産物を他者と交換するその結果として、社会的な富が増大するのです。

has the "propensity to exchange". Specializing in a specific occupation is not intended to increase the wealth of a whole society but is done out of self interest. Therefore, the increase of social wealth results from people exchanging their own products with others based on "self-love".

キーワード

・分業 ・交換性向 ・自愛心

関連用語

- ・商業社会（しょうぎょうしゃかい）：commercial society
- ・資本蓄積（しほんちくせき）：capital accumulation

日本語解説

文4 工程の「程」

ある範囲を一定の長さ・分量で一区切りずつにしたもの。

過程 物事が変化し進行して、ある結果に達するまでの道筋。プロセス。

工程 仕事や作業を進めていく順序や段階。

行程 目的地へ行くまでの距離。

日程 仕事や行事などの、ある1日の、あるいは毎日の予定。

文6と文7 拡大と増大の違い

「拡大」は広げて大きくすること。広がって大きくなることです。反対の言葉は「縮小」です。

例 写真を拡大する。

「増大」は増やして大きくすること。増えて大きくなることです。反対の言葉は「減少」です。

例 予算を増大する。

- 石坂昭雄ほか(1995)『新版 西洋経済史』有斐閣双書
- 大塚久雄(1995)『共同体の基礎理論』岩波書店 (『大塚久雄著作集』第7巻所収)
- 藤瀬浩司(2004)『欧米経済史』放送大学教育振興会
- 中村勝己(1994)『世界経済史』講談社学術文庫
- アダム・スミス(2003) (水田洋訳)『道徳感情論 (上)』岩波文庫
- アダム・スミス(2000) (水田洋監訳・杉山忠平訳)『国富論 (一)』岩波文庫
- 堂目卓生(2008)『アダム・スミス』中公新書

